

改組計画・国際共同研究そして定員削減

平成5.5.1～7.4.30 所長 田中寅夫

平成5年(1993)5月に所長に就任し、同7年(1995)の4月末には退任ということで、1月12日の協議員会において次期所長選挙のための手続きも決定され、「やれやれ、これでとにかく2年間も無事終わらせていただける!？」と安堵した矢先、17日早朝に兵庫県南部地震が発生し、阪神・淡路大震災が起こったのであった。地震発生後の防災研究所としての調査・研究などへの迅速な取り組みは、職員全員の献身的なご努力によりきわめて効果的に遂行され、所長としての自分の出番などはほとんど無いに等しい状況であった。甚大な被害が生じたことに対する衝撃は勿論であったが、何よりの痛手は、防災研究所の附属地震予知研究センターに勤務して地震予知研究を続けてきた者にとって、予知ができなかったこと、観測データの地震直後の予備的な解析からは明瞭な短期的前兆現象がみられなかったこと、そしてなによりも死者が6,000人を超える大災害が発生したことで、防災研究所の設立目的に述べられている言葉の重みや自省の念にとらわれて、しばらくは非常に落ち込んだ状況になってしまったことを、今でも鮮明に思い出す。

ところで、この1月17日はまた私にとって違った意味で忘れられない日付である。それは所長就任当時から進めてきた改組計画の最終案が完成し、その日付が平成7年1月17日となっていたことである。所長就任後間もない協議員会の終了後、亀田弘行先生が私の研究室へ立ち寄られ、都市施設耐震システム研究センターが平成9年3月には時限を迎えるため、「センターの新しい転換へ力を貸して欲しい」と頼まれ、何の勝算もないままに、「とにかく力の限り努力いたします」と、恐らく亀田先生には心許なく感じられたこととは思われるが、お答えしたことを思い出す。「改組は、関係する部門などに限るべきで、他の部門などに影響を与えるものであってはならない」とのご意見も頂戴したが、やはり部分的な改組計画ではなく、これを契機に研究所全体の抜本的な改組を行うべきであるとの方針を立てて、それからの2年間、将来計画委員長であった入倉孝次郎先生をはじめとする教授の先生方、それに職員の皆様のご理解と絶大なご尽力を頂戴することが出来て、1月当初に最終案が確定し、必要部数をコピーし終わったのが1月17日であったのである。私個人としては「改組によって100%が良くなるといったことは恐らくあり得ないであろうし、計画段階ではともかく、仮に結果が51%しか良くならなかったとしても、改組して良かったと考えるべきであろう」と考えて出来る限りの努力は怠らなかつた積もりであるが、それともう一点、「仮に私が間違っているとしても、それは最終的に次期所長によって再度見直して修正をしていただける」とも考えていた。幸いにして私のあとを引き継いで下さった高橋保先生のご尽力によって改組が実現され、大いに研究成果が挙げられているのを拝見して、心より嬉しく感じている。

ほかに、今思い出しても心が痛むのは定員削減への対処についてである。私の就任2年間には3名の削減が割当てられ、定年退職者もなかったことからその対応については事務部長、課長ほか関係の皆様を悩ませるところであった。最終的にはYさん、それにYさんSさんほかに多大のご迷惑をおかけすることになってしまった。Yさんには所長室で涙ながらに「研究所の提案を受け入れるのは無理」と強く訴えられ、「職員組合の支部長などを動めてき

た人間がこのようなことを行うとは、良心・節度に欠けること」と自分自身では思ってみるものの、結局は押し切らざるを得ず、又、YさんとSさんの件についても同様で、今でもこのことを考えると、申し訳なさと心が痛む。

以上、元所長として回顧するようにと、50年史編集委員長の古澤 保先生よりのご依頼を受け、失礼とは知りつつ、どうしてもお名前などを挙げずには、心に残ることを書かせていただくことが出来なかった。間違いや、それにこの文章によってご迷惑をおかけすることになったとき、これはすべて私の責任である。